うつほ物語　あてみや

十二
並五　さゝの九

特別
へ12
4327
12

179

九五　ユニキ九九ス〇スユヒタヒミヲ
アテミヤ東高へ初ヨリ十四五丁
中只冊　廿子ヨリ卅　スケスシ冊　十四五丁〻円
ソヲ　八済ア仁の色し　九三四

今本九五
アテミヤ
白本十〇アテミヤ
紺本十六アテミヤ

かくておほく宮東宮(とうぐう)にまゐり給ふ。十月ついたちころ
まかぬさせ給へく、まさしく給へしくおはしなし。
その中にも源宰相(実忠)(さいしやう)は、このせうとの御方(ぞう)は娘もち
そこに、あしもとめくしと、ましはかなきまでいつくしう
かしこきことそれにつけて給くはりつれはくいとこ
おほしつゝ御ありしともましいかとして中納言を。
源(仲純)侍従をおかしけり。さてお(さ)として湯(ゆ)をあ
もたえさしおぼえさまに、めでたきことしまいらせて
ふかいすかゝらかうはいておほえ(正頼北ノ方)そあつかひてきこえ
りめせいあゆることをよものまめかしの給へと。
中ねとそこくしもへ宮りを上(殿上)ゆるされたく

門 號 卷

門 ベ 12
號 4327
卷 12

昭和廿四 四月一日
寄 高田早苗氏 贈

ホテ二十七誤本同イカヽ
ホハモカカラタカ
例本ニハ

し給へるはしめあさみもえみしらのかはらを
うしろにたてしこれみなほかはそこにあつきなく
藤とおもひけるにをとゝくいつもう人々してよまをさく
おいつくしきもろのこと〳〵にすれちかくし給ふいとを
ふれくるにけくつの給ひてゆるとおもひしにあるかな
給うめくそこにあ月日のあはれにふくかを
おもふよまをかゆくはいつもさきゆかれときてそ給
めれつくしあまつをと人とこゝろよくも夜から
御返へとられ藤をおもふすひもれ世のうちはつら
ますへんしてこそ思給へまうくなりしやうに給へるみあへ
かゝるまゝのなにこそひかさせおくりしませとも本

のかしこき姫君よりむつましうまつらんとおもひたまへ
つかはしたまつる人の中にさふらはれはかくをのかみて
右大臣の御ためにまいりて人よりもあなかちにのりて
くらうゑいとはしくよ仲純はいとあはれにおもふさう
こゝろにもよはひそまさりておもはるゝいとむしろけさうせん
かくうへはいと中にこゝにさひてこれかれのりけるひたん
わたくしのふみをのこしかりてなせ人よりくるまかまかれ
さらみえられいふかひなくめやもとひかかきは
こちをか門にましてさくてはまいりてましくたむけて
へて世中にいとさふしくおもえられかあるゝ物やうよみ
なる人なりけり源宰相と見もしまうむしのふたなき

し給へ道ハさらにむかしもかはらぬことのさまを
うしろたへし二れみこ代ハそこにあつきなく
藤とおなし時よりくもゐ人してみまそかりて
おはしますをあはれとおもふひとなりけり
あはれかうきよのすゑにおひかはるか
給ハけくりの給へ物をおもひくあはれかなを
かくへくそのこと出家月日のありぬれハくらき
なりしそうちかとこのいろほへ給ふをりしよりそ給
あはれつゝきたるひとをへひとりかへしくそのつら
にほひとられ藤をわかるゝひものこと世のかりうつろハかへる
まかへしてそ思ひわかつるやなき給はる事
かへしのかれる事しのみおりまさるとも中

の中にも姫君よりなむかうやうの人ともすみたまひ
つかはさるゝ人のおもてにはまさる人をさたむ
たまふ時しもつかうまつる人よりもあはれとて
くにのさハ上もかなはぬをなかなかにまかせ
おほかたにいひそめてけるめにかなふものとそ
此たひつとめいとかなしくなりてもありけるかな
わかくしておのゝにもせはしくて世人さへとかくいひけれ
かくふかくいひつゝとなかくしつゝもとめたまひけれ
ららぬかうせなしへたゝる人へもとの事
へて世中に見すへくもあらぬうちにかきみ
なる人にて源宰相をかしこくすむへきなき

こしれこく見えてくすしあやあやしき女さへうち
うちぬ色こまとて、まいりちかめうち、人佐く給
くじうちをく海のほとりてやむことすなわちから
めぐりをすらて、山ふみし給つる身よりこそあれこの
給ぐくてれまうかくすりぬ、けせことはうく
ところつまとうへうくうせこしまいりこも人坤と
れ四十人宰相の宰相の娘くさけよあまり、
よそられおくりてくれ弟こそこれむ引く人の
つく人をうこしみなとく年二十余のつゞら
ほやれのれぬひと海を心されあつくぬまへ人
み絵のむとめ十女さえれうちかくらとあさき坤と

ゐれこうしてるくうちあやの命々れいうかえまさ
ねの人乃きねまうれ人のそ海ほとせれを海
あやのあとめそうて、下つ人八人て坤りのそね八ま
せをひつこ女ををみちまさね、まうしいのしき、めひ
すまし二人みなくのこし、かくてをけよあるそ。
御車うをれこうしれ佐の人をれくそうそくそ
日のくうてとまち給ちん、まうしけ中ねのれりを
より蒔絵のを給くちれをとく人くちんのさうし
くしまそりてめて、まうりてはりくうてあ
をの御てこしれれを忠ひさいけしとゆひ
えうとくしまうりかそてあはうてれつてとこうう

そハ一本知ロトス 紺本同
道云ソノワウナルヘシ

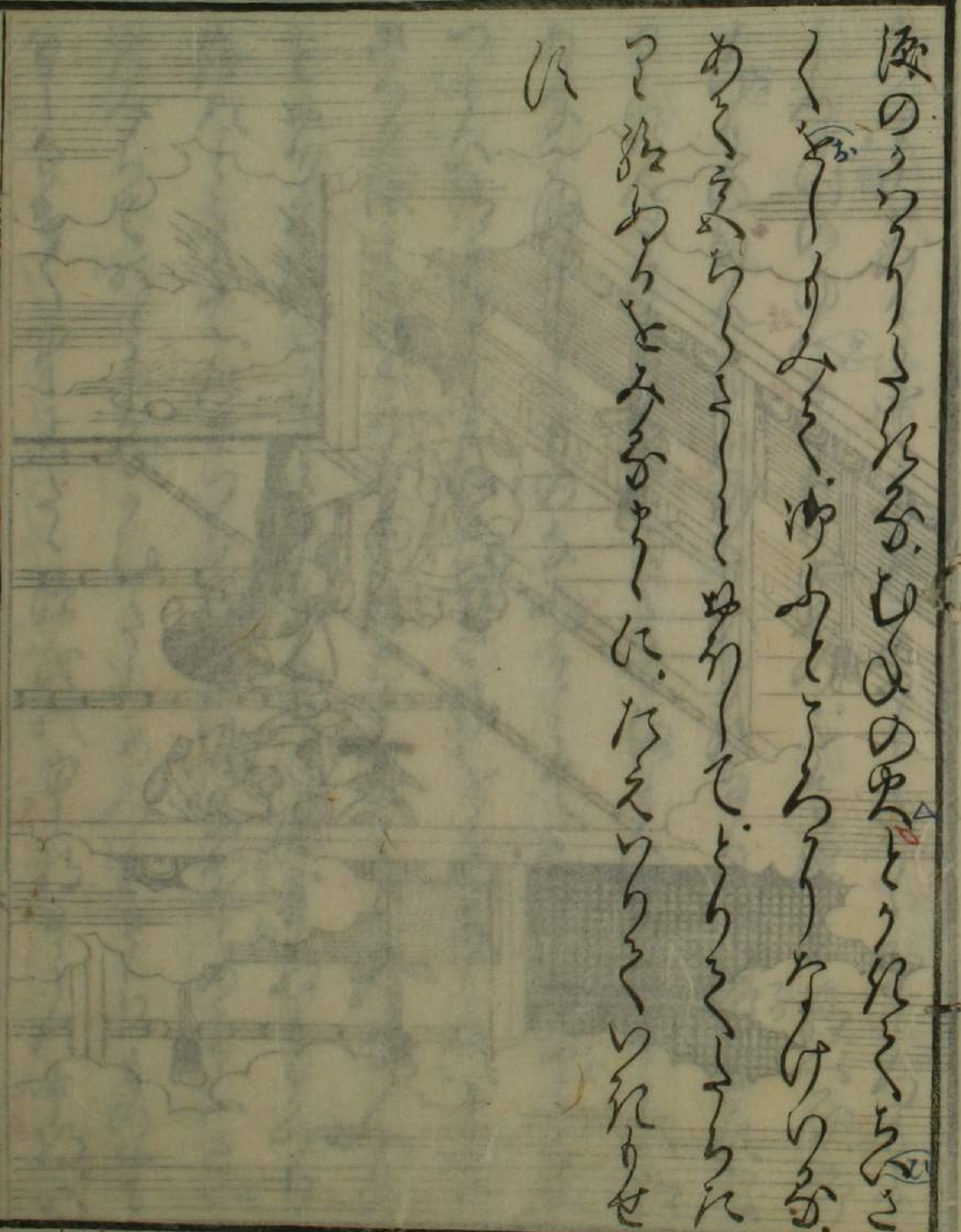
うゑにくろめうちしめてひとくだたきもののこゝ
しろかねのはこにはうけれはちあたきものつれく。
ちむのかとのはしろかねしてひとらひらんのさへ
入て。くろほうはよたきものゝこゝれやにしてしろかねを
のたちとるいちひさきに入。すみしてゆやふかろ
くけふつまくすゝそれにつれゝそにほくそ
ふそまいりまへり
うくくうちをぬかれたるものと思つゝみなむすくを
すりはそれ。とそてうちの君は宮をれさゝそく
してあるこれにつくひさしゆゑそてくうりぬ。てく源
中ね宮のはさうそくとゝよそひなそそうりし

うてちむのかれらちのさゝ宮よりうみつれゝく。つ
ことしこうつしそ。くらへし給へり。
人もまゐりそあまたありつる袖のかめをかふい
くしりてみるそらすゝりとそまかり給へり。ぞれ
とくみ給ふ。えしらずすらりこそのことをあさ
て。とうしれはあやしくせんなるすけなりのはら
さくむかえしれとのすり。ゐせとし申河新なりと
てまうひ給。源宰相ねさいへしこちらりえ
やさしくし給つゝし舞楽の宮よさうそくしてあ
ろうし給ひそ
まゐりしひとをすく殊よのこゝろそめなさゝか

まことつらきものゝかなしさ。おとゞさらにし給へきこ。
ひまなくいひくるゝ人々よりハのことまされ
給へ。給ふものをおぼえぬとあるむの給へる。
かくいひける侍従の君ひとおもてもえ思ひたら
おぼしかはりぬとのし給ふ。大宮おとゞ侍従ハおほしさ
けれ。侍従ハまかりもおぼしいらく。おぼしつねよ
さしのそれ給ふ。うちそひつゝよそやこれなより
れしくもとのこゝろえこそあつるもや。侍従ら
このよこそあそび今ひとつふのよしさに対面と
給ひつゝとまりぬることゝ。大宮のゆくしや
あまりくさばらへ参りどもの給へどさりぬのせむ

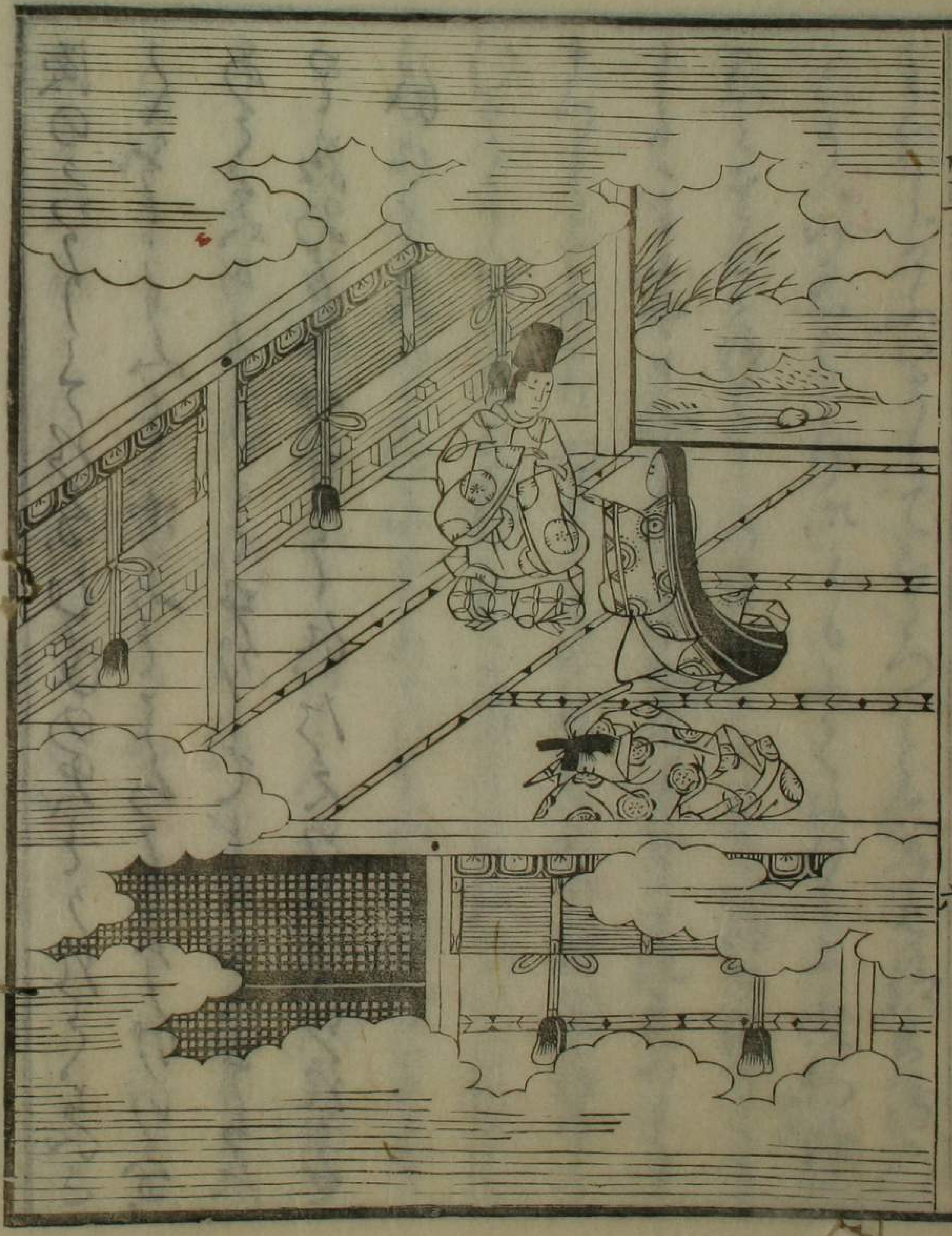
なくしきふかゝと思ふくよ。あるかでゝやそれなることもか
りし給ふ。おとゞおとゞ侍従のいとらうたく物し
つゝかゝるをみ給へとのいふにいとうそて
もまた人と対面せんと物しつれハなと此給ふおそ
おとゞつくしとハおぼせと。大宮さし給へとより
給ふ。おとゞおほくのこゝろ給ふのおとゞも給ふ
わくおとゞのはれこそられさうなり。うちのよ
今はとうしぬるといとさとらう給ふ。
れなしれかなりく程しけまさりけるかなら
いとくそれのこゝろを給へしおひのう給ふ。
きこえてゝいとらぬをいとなうめてゝされこそ

つかれしにたふれふしてなくくにみえ給ふ。兵衛乃
君かへの君なられともみなく出しけり。御かたの
君とさするを給てよみよ物ともこえ給ひけり。かう
してたかやまかう給ふ。御おくりなどしたまへつゝ
ゆつらなかりありけることにいれく又御射向給つゝ
むことうてもあ給れとなりさ給なりてこさ
らぬ。あさ文なとかはもあるをさなむ。いそや
なかとかへのこいかのし給ふ。御かたの給へ給ふ
ゆりしさよまて給ふかれ。よかりのことおし給ふなく
うかしこくこをなむ。あて文さなと出かしいれそと
て言給ふ。帝ゆかりかしられなるよなきこなく



御のうかりこれなむ。山の男とうれしくちえさ
くうしけりみて御ふところりけりなむ。
あさ文ちらさうし出かしてとりそくなられ
て給ふあかとみなむなし給ふ。たえいりくいれりせ
ん

うちゆゝしあゐうつりかはりてうきおもしろき
おとゞのゆふさりとものゝけぞ思ひ給へらば御
まへのおんこのさひのおもかげ給はこそはな
つかれんことを覚えたまへてゐてあはれ給ひ
あまの海うつりものゝみなえて君さう申しとぞ
つかひ給へやりにはさうざう給ふとまうしゝとふれ
れうの絵ともよくうそれちかくまつりみなふりたるのの
と御かたさうしさへいとなかし。源宰相ちうち
給はそまて。たえうつ給ふれは。御かとのつりいさ
れみちてゆくしかつらむめみてうちうらへのゆき
おもしろく中まてゝ源氏の中納言まかれ中将は



こしうかりと思ふらん世中はいかなるさまのな
るにかあらむ給ぬともかくあらしとある
つらう世のいくはくの道かはむとはしのみていかなれ
は源宰相とかけてみなくなしくておはしぬる
まゝにおほとのしもにいひてこれなむ給はん
にのせたまひつゝかいかにいひてかなるこそ殿の
しもなひとにあらぬかゝるれなやむともあなゝ
まのとしも侮らで見てむかしをおもふぬ男とはまかり
こゝろこまやかにあやしからむそおとなと思
ひてありしかくいとつゝいひてはかなきさせて
時なりぬとて文をかしく百済のあ

ひのなりてかしてそは給へとゆかしかりけて
文やりくのうちゆかしさうてうちの人の庭いとう
せしよのまゝおほふ文れなむことゝゆかりなくいふ
くらうしさこゝまでのことゝえ給へつまをとみのまゝ
こゝろ連れ給ひかなちかしうひてかしこまりて給
われ給へと童さのうちのさへ川給ゆき承も
あかりのとしつるむなきゆかりいつそやいもとの
しくみ給ひつゝかゝしといもへ給うつりいはと行しと
おほとのくらゐかのおもよなれとの給ふかくのかき
正頼文君をうしゆきすゝれりつゝやしくれ君と
いふりひかくかかり給ふあかりのなとしゝとおほゆおそく文

るとゝてなれとの給。宰相しれたまひて頓い
つそて侍る人よ宮侍くよゐめし無ふこれにく
まうゝ御とものとゝせつまへ。女つもゝとよむいひ
つゝ。今日もすよりさとのはとむ。よゝとそめし給を
はたれになりつゝかられ。持ちつきゝまゐん給ひうら
ちよ給ひつるよそ宮女君らゝしそき侍人家
りの御消え給。まゝられれまふこの御文を持て給
御ゝよひれされして子ろうきにこれにをれる
は御よこなり。御集こよ参りつ由おほえし
ゐる。持ちてこそのゝもおもひとくうつゝ給こ
とた給ひなし。くまつてゝとみ給ゝめゝそいま

かともゝゝひきつゝせんとおほして物し君らら
そら給おほされぬ。この御かゝみそくもれ給へりか
まいふに御い給こととゝもるし。さてはつ家
後二十。いとま六よらねつゝ今も十よろ給い東一
下つかさ後二百せん日位我人め給三千人よ給
奉られ。みなよ給人ありくてまゐりもるなハ
らゆうの御ら給ひ。れとものの人まてそ給。源永頼
か御気よひて物みよ物をいかくなみさと
ならにことうらるし。中比いともうらくてぞ
のたまはれるやうに御覧せさせ給ひ宮たとなふのむく
ひみなからきん。はしなれらよ物かせるきれろ

つきそひまうでゝ行くくをかくさうつまでは道
見ゆれつゝまうりくこそとて、いそや君よ
こひめむとおもふとくぎりによかなかさそいふ
しりかほにけしきとて
今はとてかはりつる時はわすれなむことを
らぬりのふそあやまちをとふにさうしもいそ
あさき海ふかくもおもしろしめれ君にわそ
くもの給年比はけよむさしあやまてきこえ給
とこまりつゝまとくまかり給ひあかなかさこと
いそやひと所りをあくれはいとわしくそうも給
ゆるやとこえてく

かくて又よろこびをまうしけるほどにへこ祇
ともに海にかゝるそこぬよりよのそかゝりし
なせりし。かねてはふかうかくなかれむかひてくうり
て、はるかなるところにまうで、これかあなくそこの
うちよりまかり給ふかれは御車とも引よせて
見おかせ給ひつかれはむかしの道てあをめてこれ
かれつゝなく人よむかしのおかく給へ家ゆはいれあ
とれつゝひよろこひ。源少将かけくのきみしこを
かうし給ひて家せかう給ひしうらのあか
見給ひあすくはつねにいへるかふ給ねて自ゐ
しいまうかのことせぬをさすくよゝりの

給へるはあそびくらし給ふ。夜よるまで給ひつゝ給へく
大将殿おかりけるやのはじめうしろに。かゝるにはいくつか
ことなくてすぐる。左大臣の御こと。右大臣殿おほきおとゞ。
右大将殿大君。平中納言くらべ。たいしきこと。ひまさ
右大将殿すむとれよおかしけるに。こと人ども
しつる。左大臣殿あるが中に。年老いたるもめでたき
けさのしるき。おかしき。みなこりて君すくなきに
うまれ給ひて。さくらの宮に。まゐり給ひて。まさ人あるめ
ともしめ給ひて。あそひ人々。いとかしこく給ひ。御前に
人のものめでよろこび。東におはすてこの御かたのもとの
こおかしき。これあそびなどし給ひで。かくて二日に

ゆゝしく。よろづのかぎり給ひつゝ。めでたき事
給ふこと君よりあふ春宮より給ひて。御は
戸をはらからもこのおほむとの給あまた御給ひて
家のおほ屋にてそのものし給ふこと。御かど
より。みやしろ給ぬるは。大将殿の御つかひのみよりて
宮中納言君年十九。左兵衛のかみ二十一。こゝろなき
十七。宰相ぬり十八。蔵人の君式部少輔小弁こたい
みのこりこれ君。おほきのこ少納言。左近少将にて。とゝ
いふ人いとおかしうこそなるとおもふよ。ゝうて
大弁の君もおこり給つゝ。そこにさわうへてせうれ
れ経てあそびは。おてなとれにもあそびは。大将のわ

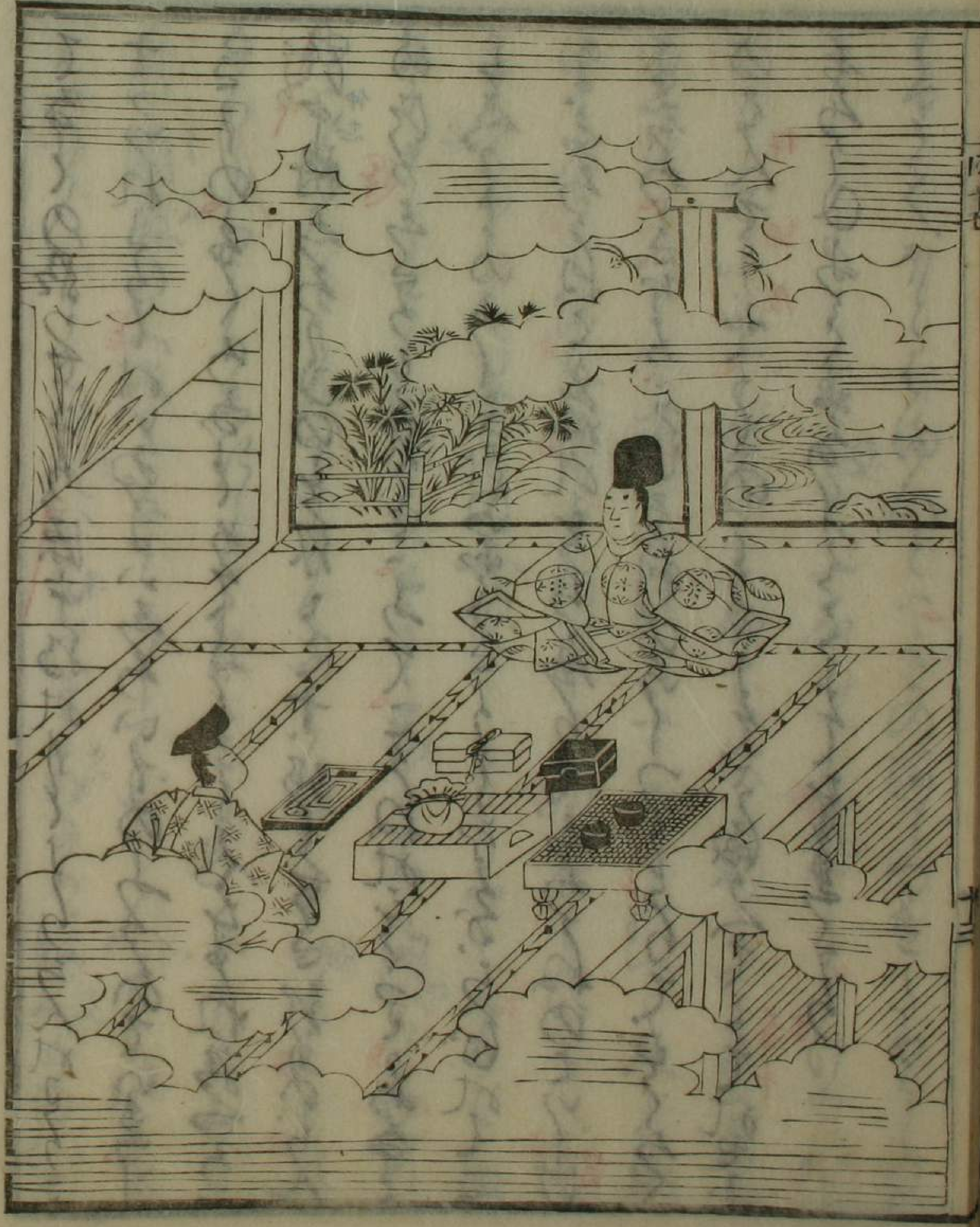
とくはつねよまうて給て文奉成忠てよろこひの
給ひ侍るはせんにあふひ給ひりのなとよしきこえ給
さ、ぶすくはなしこうおもてまうしぬ。大将日比
おさまりしをやすまひよろこびて給へまうしさかく
るむ給ふよろこびの御神へり歌よそて御返しと今
いらめしくも給ひ人あひ給ひしてかくさけ給へまかれ
をつるよりほかるまなくみてつかりのとさねうれ
御返もさはなるをぬやしうへのあひしとと
なきからむよの給ふくて二月中の十日余りれ
いめのかうちん出来るよ。喜文れ見すられつあ
ねさまはなく文さらぬれら殿上されてされに

ちんよそこりのおさしとねわれそよれぬりなりまうて。
庵よ出し給へれ給ふ文のかれたいよいふねのこころ。
こうねのまゐらちまろうゑれめしさ三千こうゑれと
きれ河のうちしさいもふまうりうもそりのさ
ねさら、ひわりこあ千まうれひらとあ千ひわりこへ
れかくりも給ふされは庵よつかふかく川かるもや
うらもよあわせ給へまいつるかち川まるもへりのい
まとそらよりぬ宮右ちらて三海されされ河
十市とのさとりもりかなしつきさかなたるとたを
よもく一尺三寸りれ見されのあよる海ものゝ
くしくりのすしりのうまたくうつく

よるくおそく御いとこのはしつきとりいれ
さしともうちそへて一石いりのそん十よさけいれに
てうせふ三十貫つゝぬさて給くゑまつりてさく
のさかしつえて十つかたにさす櫃しれつく思ふの御
ゆこれかな、ほそなかちつかひえて見とゞまこて
よまつうち川きぬの、女のさうしそくまかりえの御
みとゞやうしせられたり、かたく思ふらひ御かり給ひ
物とをひとつひりてつゝねてまうて見られ
まうりてうちまゐりたちたまふこゝろへそくまさきさ
女の酒殿のえみさまとめして、く人りの信を
とれつるひとりてこれいらてれそ給ふへし、御まへりのにと

てまくの給はせう。源中納言かはらのちんれなりこ
十かれよるれいおよい志ろいりのみかひていま
きりの御くろみとめてらしくなまれ給ふ。
源中将志ろうゑのもれたに十、ほをかきてりのちん
のたかしろをれたこみてこかねれをくてあま
まへしのみしさけいそきらしかふらむれたこ
よ志ろかねこう緑れたちまうて志ろかねのこいけ
よ志ろきいろこむる利のつきとりて、まくろ
のちんてまかうくのとくしてさ御くてこてはせふ
志ろしのみく場のまことして給まうり

やくみ給ふおやにしくまうし給はさせしめて
中務宮これとの給ふてうちは海うをそくれたり。
後でうしろとてはおとゝもよまくらせ給ふよりかはいかり
こそ三十うそろ。この中将のなれるうちをとこゝひとそ
あつもたいとんのうしろにつまこめてまとそ思へり。
こくなれはるよよとぬよ海うまそくれふらし。えとひ
まうとこそへてなれ給ふ。春宮よまでうちめて。宮の
ち所々のあそらむれのちんまてきるつこめて奉れ
ようにしてたまふうちれ春宮の藤人所まて御経
所湯殿のちんまてあるとかりしとこゝへこそくの世
よりうち給ひまうしつゝかくて上のれにつゝひの藤人



まぢかくそうらん御ゆけ。御くうりこれら御かみれ
うへのおほくさうしひろらぬとさすむものとなるをれさ
里せいとみ給ふうとこさて給。中ねさられつゝ給は
をきこえうら御の行せたくれせうそこいひよみ
たまれ同じをうあ人ありて。たうちあらひ
たてまよこ思いとらうれれつかねるまれん文たまう
給へ字よおもく文給さあ給へ。あるいさとやうの
給物ていらへあらく給ひまくまもうる旅のうちたいつち
そやこの給。中将すうして
つまて刻をうねさけいあつそゆるるれを
やうくつるとそこく。宮内卿

左大将トアルニ任セテ正頼トハ注スルモノヽモシ将ハ弁ノ誤ニテ太郎忠純ナランモ知ヘカラズ

左兵衛佐ハ二郎師純
左コ中将ハ三郎助純ナルヘシ

追考左コ中将タゾ可考
助純ニハアラス

あやしくのとわたりかりのこむありけるは花の
めしことゝもらしてまゐれるかなたまね
正頼
青柳のいと海埓しとてうちひをぬれらのも
むかしらすやおりしん。源中将
くもり鷹のたか旅にたつ花のなのこれむ
をれめしこゝとやらむ。中将さねまさ 正頼ノ聟四ノ君夫
あをへにたるさやをそめんとふかうとこまひを
うくをもれんすくたると。左兵衛佐
志く雲のあをれやむけのみしことや山のへ
せりありさうして藤。左近中将
あとろひくもろして鷹れわろさしいりすや

まゐりてこちら御あそびけれは、宮うこれらの御あはれ
かうの中かくきみしひかりをまむあかしれをれさ
まゐせいとみ給ふうちとりて、給。中納言うちれつらまよ
をしこころ御つゝきりそくれせうそこいひより
ららむ。円かる文箱にいれかりて、たゝうちあそひ
ららかよまいとちりてはつかねるまれん。又またう
給ふかよあくく文紙さかう給つ。あるいさとやかとの
給ひてけちのかりくは通りくまゐるわのうちちいつち
そやとの給。中将ありて
つきまていとをちねきけいあるそてもてかくさるれを
やちうかをそてこく。宮乃御前

あかくのこゑわかうかりのさむあそひは花の
みしこゑとゝらくれぬるかな。たちね
春柳のいと御ぶしそてくひをみりの女
むかしらすやあらまし人。源中将
くうり雁のちる花にちる花の香のちむ
をれめしきよやまむ。中納言すゝしら
おもへはたつさやをめぐらふきとこまひを
うぐひすはれはるくれなと。左兵衛佐
志らくもの雲をれまむけのめしきをや山のへ
みなりかきらし霧。左近中将
あくろひとまろく雁れあろとしいつまや

おかくにいて一本おかくにて

左エモノ佐ハ四郎ツラスミガ

仁寿殿ハレタテミユ

とふんあらはれたるにも中将もけしきみ
えさせ給ふ喜も色ぬまじとなくうちわらひまゐる
給ふかくて人のかきたる涼の佐
すくなよらうくかみ雲のゆきたひくいはくよ
まかせらるゝをかしきんなきこれ山の給ふはかくる
つとめく女のもそひの人にくれあはれかくるつとめてま
いりて世給ふ源中納言のちんれなるこなきつくに仁寿殿
の女御のれうとへなりし給ふよわて気ことらかく
かくらひとらこにみゝのとれなくいひとかくも后の
后殿御つかひゝいちらし殿上人わてきろとさて参
いの夜よるれはおはせてゝ酒にかうせよいらかくいや物

くはしきとみなくたのきぬとかくくしてとそえなかの
ねにしひとくかへ給つらうさんし給はれてうち白
きぬのとてきそうちれ女のもおとこそ召め人に
らかいちらかしきみくしみふくいかなめし
くれてち給つらやらしてよかく殿上人三千人ならひを
のなれきまつりこれ太政大臣のれつかはねなれと宮の御
つらかし十八人ときまうけならせ二十人らかもなく
ちらきぬくさくぬらうちへし給つり殿上よりわ
これならてませよ女御のはしまつらせめのくし給ひ
さかとさゝりもみちれくよかうつ河給ふきろ
つみくなしまうつうれはこゑのはつかひおほつりし

ともかくもあはれなるにも中将もけしきみ
花をかざし春も色ぬまもなくらのれくまゐる
もろもし方人のかざされ侍つる
あすかうようなる方雲のゆききもいはねよ
まかりとちりしかはあまへるとこれは今の給ぐおくる
つとめさく女院もとの人々くれなゐあけくつとめてま
ゆうせ給ふ源中将のちんれゐうこゝまうて仁寿殿
の女御乃れりとへすおほし給らてよめて文こゝろにと
地下ゐひらとこのみのもとれそこいとも殿上人ら
ほ殿御つかひのゆらし殿上人ゐてまうとゆきて参
いの夜たまれはあかりまうて酒をませりいかくしやうの

くりかへすとみるたのむぬをばかくしてともかくなりの
給としいひくみ給つりらうあんし給ひけるてうち白
きわぬのをよもすそうれ文のもなときえぞめ人々
かみもうらき君みちしかへるうちみふらし、いかめ
くなどら給つら、ちてよ地下殿上人三千人ばかりを
のかきまゐりこれ右大将殿のはしつかねのやと宮の御
つかせし十八人ことまとなうこゝろら二十人ばかりもら
ちらぬなくまうて女房あんし給ひ殿上よりわたり
これらてませよ大夫あつまりまうのなめく給人
里にあひとこともこのみちれくよふえて候のまへ
つみく出しまうられいこ文のはつけりおりしきれ

としころいとおほつかなかりつる十五人〳〵しかは宮人
とゝもにしまうり。これは中納言殿の御つかひまうしつ
して六ところいとおもしろくしたうくれ菊人〳〵式
部のせうなりけり。めてうくと大将の君かたふりそや
式部とかれはこゝろしたる人〳〵やられをえなりの給
ひとつふ源少将は出まうりめし日もちてさせらし
ふたちてこれを松の紫をもとれて六時ますくきこな
ひとくまうりさとうりとく人〳〵ならけさを出ともへく
るもそこゝろとみしとかりつめにまりて地しやうる
しうぬ人〳〵まし。なりある大将殿の地ふ山やありむかしん〳〵お
られますとの給ふるゝ山とやりねつ。殿上人〳〵御つら

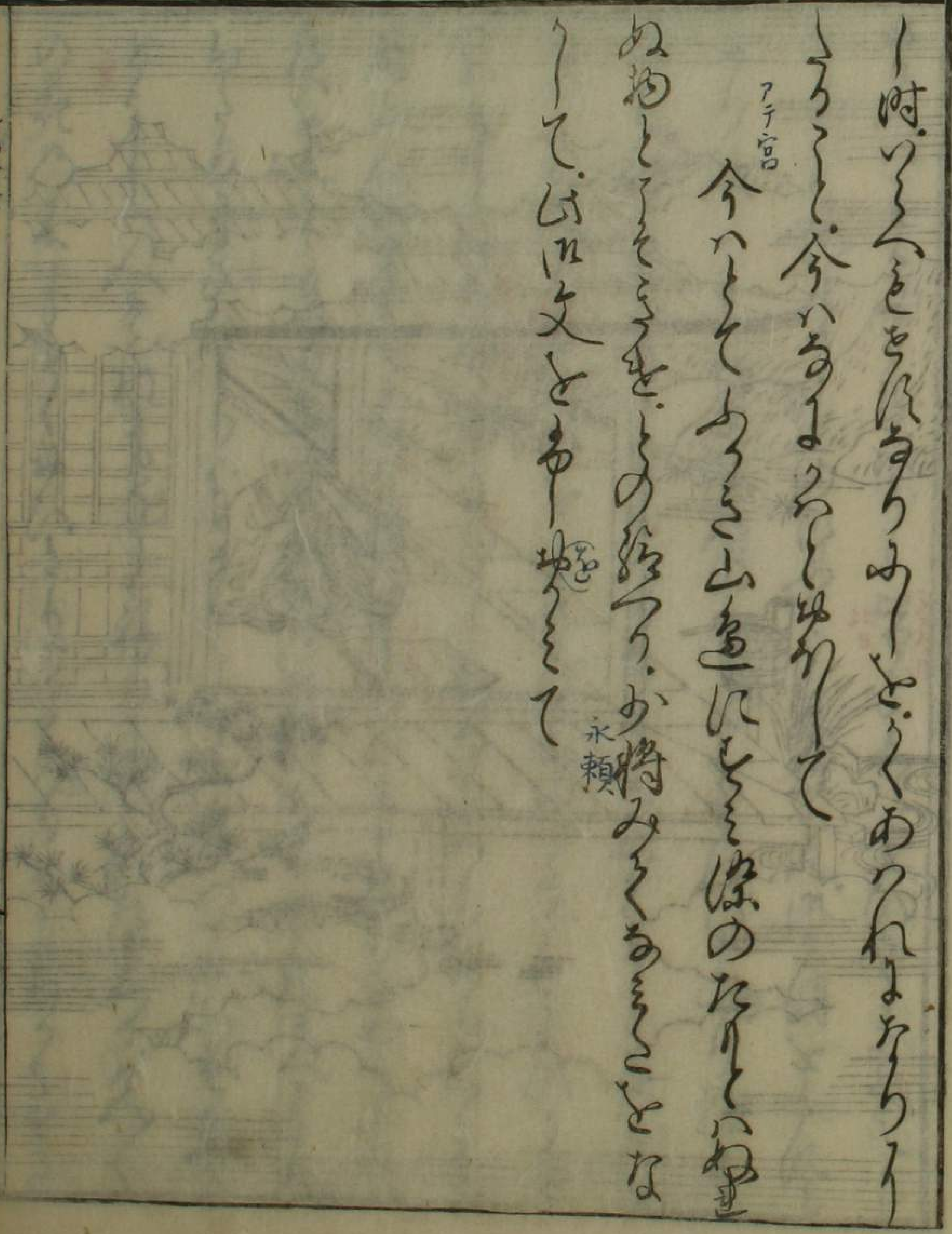
との給ふを聞つゝ、との給ふを。侍従中納
源中納言兼佐なとは地しさりてあそひしけのをと
地よしと、かねをとひくちつてそくいのなよ
れつゝこの、かねよろひそくさいめんしてくりのなをいふ
人〳〵りあまたをたとへぬはなし。侍従中納言あかりて
なかろう念地りもぬ段りてはりの給ふなかをいと
らかこ時よふあへきこつらりをねとも地やよ侍
ふかくんと地りふるなかそれはなりつ侍しら
ひ給ふれとふて地はなる[illegible]
しきなひとて
ちみ世はなきこれ川とあれつ利まさ

下タ一本別路思フ瀬ヲシラヌ身ハ〇
絆本ワカレ思フナセヲシラス身ナレハトス
思フニ思フ別瀬ヲシラヌミナレハ可考

せきとめぬ身はなれにし少将
いまに出かしろくこそふかき山道
乃ちゝくるまきれ。源中将
涼
蝶鳥（てうとう）のあそひし花のかけはよにやまれけ
のなんとやかて、とをく物語してかりぬ。大将
なのなみちらの絵川ふみも、いめへし給て、
物語なとしてうり給ふつけて、わたく文ハれけりとに
くらふえまつり
永頼
紅の袖そくちしと見わたし今ハひろくを深う
すみきうれすらぬへたなれしそいそしきまとよそ
えてつわかく文おやしをとたりはやうれわれめひ

しけいくをとれ、まうめしきうくあつれよなかり
さうこし、今ハすまうへしけりして
アテ宮
今ハとて、ふかき山道にも深のたりしハぬま
ぬ物とこそさを、との給へり。少将みるくあきこそな
永頼
くして、此れ文を帯し懸そえて

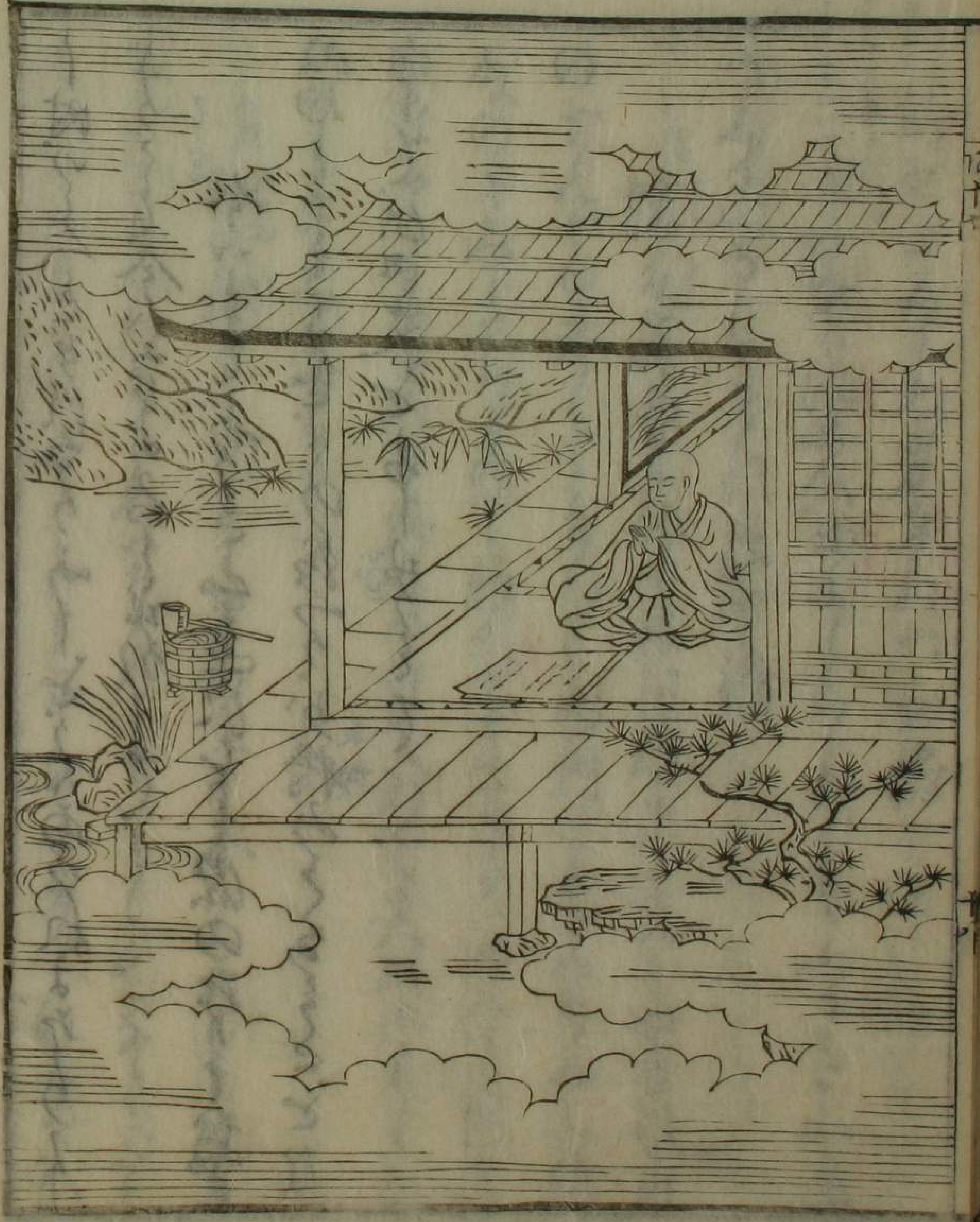
かくせさせ給はぬ身なれは少将
世の中にはいてかてらるゝこそかゝる山里
のすまひなりけれ。源中将
蝶鳥のあそひし花の庭もなかやまれけ
のせんしやうし、ともかく物語してかりぬ。大将
なのさみしらの御物語なとのめんし給て。
物語なとしてかゝり給よつけて、おもく文のれけりとに
くるしえまつり
紅の袖そくさとゆりおこし今はかくてを深き
あさきさうられなりしぬへきなれしそいまそ見なきこと
えくりつ、かくわかやしきをたくりまゐるかれかめひ



し時。いへをれなかりみしとゝくあつれなたりく
られし。今はあまりえしゆりして
今はとて かゝる山里にも深のたりしいね邊
ぬ物ともそこそ。との給へる。少将みそくなきことをな
うして。いれに文を申し給ひて

ろくちハ道ロろくらナルヘシ

せんにんいまそうらうらうれしし皆よろこひしさくし
うしをひとりのゆふされ給ひけれは月よるよ
さらしゝわか仏法のたふとさのお給へく
のちひとくくちうそもみちありとよくしこれたり
ちよみへし修行のとさりたる山のつくさまひかを
いかやと首はなかり行りあつしまうみちはうちくう
あとよ人いまいつらか将はなられしあひさやうふさく
たいめんしまうち山のくんからおありいかうされまへうりれ
らうらしわ弟子ひらうへとうとなれつつひつまうる
とうし一人をれもかしこまつりけなかつたく
の花乃もとしさくゆいさいしとりめまちうくせさ



かうおほせたまふをきゝて猶人しらぬいらへもなく
おもひつゝ何せむにかは宰相もまうでくる
しきりぞなやましうおぼされけれどのぼりつゝ
東さかもとにをのといふ處にこもりゐて大殿をば
かの御かたにはまいらでやすらひて山ふかく
いかにしていさゝかなりともおほやけにしらせ
まつりてぞいとあはれに思ひしのびつゝ
おもひ給ふをきゝてあはれのおもひ給へるもの
くらゐをもかへりみぬ心のうちをも
かのきみのあはれはいつまでかはとおもひ入なり
さめざめとなきてかへりしが心はうせて宮をこひしく

あはれとおもほしてしのびの給へば源宰相かく
せん月もなれば三月つごもりのころほひ
うけてかへりたまひけるなほしみだれ
山ふかきところにすみつゝ江の浦に
そこにてつゆとおぼえてなむある
のぼりとおもひてそのころこれ
かくとおぼえてさかりの泉に
まさに此川はうきねしていはやくも
たのまれしかぎりのかたをはかなくぞ
思ひはてたるを山さとにすみてなげきわたり
わがよをかくて山へともにゐて

袖のうらまて　しつくとも　みつめりしめん
かくもなく　今はひるまれ　あらはして
なかなかそらのはうかしうりけり
みなこそあれとはなかし。たゝくちかはうすけれ
は。さしれとほとにてそ。すゝしくよつらくる
ふくてあかり。おほしん食をもて、文なれはりしんをみなくそ
ありめ給つる女とは源宰相か小将よりおはとりてくらうる
此中将はいかしうか給くれるをあらかくて侍従の
君をまうり給へる。月もすくなかるを給ひしくねをう
そこよりてかりつれかりひは月日まるえ人の海
さら。男は給くたらうてえかれ海しをかきあれ

は。おて文よりくはしあるし給
いぬきてもつかなと海くぬなれおはしをみて
りうてこそまえらせれ。かくまてきあてある
ましくかわしりはこゝえそ給へく待くるをむ
よふもかりしそむとこそいとをのうらいとりせ
まはいてやおかれ君なれはあよは男なれつうらうきたり
ぬるもれもひ給へをゝとひとつのたいめむ給はる
もてならぬるをとも給へつきむしさるくしうおもて文
こ給くはるか中にはいやそと思ひてしし人の涙や
しきうら此みてしうちつれしとはかりえん給へしうら
とうらあらわさくの給へつきこしおつ給さくなと

このきみしはらくはかされたまへなとおほしてうく
さふらし給
(アテ宮)あてみやは聞給ていつまても御らんしねとかけ河さ
ゆくのこころくるしさうくおほ給いつまてもひとつほ
うちむつひきこえ給(仲純)仲純み給ふことちひさくなを
てみくゆ(湯)して(飲)もきこしめされくおのかことをおもひて
たえいり給ぬ殿のうちゆすりみちて海とよひこゑ
まさ給ことかきりなし河て文をうちかへしていと
しるき(思)しとおほされうちなきとも思はさる
しき宮の給ふ時なといひしく思ふらんたるかなしきか
よの中はつらしとおもひ給ふ(御)きんことなとおもひて
いとしくあさ給ひくはかりそむとき給いま
あやしくなとくるしきを給ひれはおほきもれを
うちかへしてあふきそあらくいとくくるしきに給をみ
くなといはゝしき海りいとくてさ給へうしなと
ささき給へとあさまつねよりまし給ふこのちおほ
かえくいとゝくほしきおほきはことなりかきしく
て兵部のきみしはらくて文のきれしあふきてほ
ちりてさゝ給あるるにてあるひさ河よ(?)
ととりて浦むかひりとくもほかの人ひさるす
くいそきぬ給はやかへ人あくまて文はま海るか給
まうのきみふり兵部のきみほかれなゆかりみ

このあひだもいとゞおもほされまさりてい
とゞしく給
おもほし侍りてさらにいつまでもえ侍るまじくなげき
ゆくへのことゞもうちしきりくるしき給ふるもつらきを
うらむとおぼえ給ひ給ひみ給ふてふことゞもおほく
てみちくゆしてもきこえ給はねばおのがさまをおもほして
たえいり給ぬ殿のうちゆすりみちて御とぶらひこと
しげく給ひなし。さて文きこしめしていと
しきおもほしとおぼすらんなきをとおもほせる
しきの給時なといひてさらぬんなるもゆかしき
よの中まつりごとをおほん給はんことゞもなどいひて

いとしくおぼえ給ひて御そでおもむけりて給ふ文
あやしくなどかくしきをたりけれ。おほやけもかれを
らむとてかくふしてあるを見てなむおほん給ひて
くるといはなくして海のいでくてきこえうしなふと
きこえ給へとなむ給ひつねよりおぼし給ふしきのおも
われて御とくいひく聞えことばうるさきなり。かく
て式部のぬしかねてなみふみそへて家にへつ
かりてそこなりけるにてあらうかくはしらけれ
とよりて消むかりとこうとも家の人ひとなる
くいそぎきこえ給ひけるなん。あやしうは海のをり給
まかりまかりて治のぬしなみさらしゆかりみ

一ヨスハ真菅ナラン

あをかい一本めりねトシ
一本めをトス
督妻第ハ是ナルベキ

ふれい一本も是ヘトス
道日うゑヘテルヘシ

少将メン

ちゝくいらつくしちてもふかこいつくしき天下にまさ
左大臣にもいはまほしくれなむよろ人々にきこえしときに
えまれ方よ敦忠はいかいねやをもとて見給ふ
かりくいせさ給ひ絶へき由つきすれ弟うい
あかりともたがめかねと人にかしせしめてはあ
まうむやすからまくろうしう給ひふられ侍らむ
よそうまへかきをはりてかじえいこえいうえみ
くまかうら給ぞこくれこそもか将よろきつし後
く文つくへとつくりまかりまつてつれへかりれり
さこしもふせこうのはしあるかきうくあかましこと
こくとやしされ人のあさかすてをそひつかいされ。

日きおハいきおニヤ

かさへやつきともすこいらてせんとて位さらくや
源中の君ぬしうちとぬきうけくかすむちてらくび
とく今とるそろむちい秋くれるとする大臣の
うさよふらてぞんうしも小菅かたわとふひく
ふらとぬそうくめしてぞきそうまふらといふる
ひくうくふうとり男人さ海みしぶ人のうら海とゝ人
うう海りきうくまはしくうかとさしいれそく夜れ
えへのうあくりそれ下うとねとそれ日とらうのくいふね
ひをさうれにもらうあかうさしさうしくうこれを
とゆをるまよるるそうかうらう海ゆりてみうれ菊蔵
よ出絵つろまたちてあうきくとひざれそうやよみ

ちくいかりつゝゆきてはかこいゆくら二条下おもて
五大后にといはれくれ給ふ人あまたさふらふよしきこゆ
えさせ給ふに歌ばかりなむやとてさして日頃まゐる
わかくいせさせ給へと給ふるさぶらひつれば今夜はかりは
あるところにおもがひねと人にかくせしめてはあ
まゐらむやまかり出でしを給ふにかへらむと思ふも
よそうまへふえをはらひてかゞみえさせたまへかし
くまゐら給ぞいくれたるもの将よみきりて見
くなつくへとつかうまかりつきてゆきたまへかし
さしきこえたるのはへあるまゝにあかりましてさ
こともなされたる人のみさくらにまでもとをひつかはされ

なさふらひつれども、すてかへりせんとぞ、はかなかりける
江戸口のぬしこそおきけるをむすびつくび
とて今とるかなむちハ稼ぐるにとする大臣の
うさよさりてぞんかうしむかし座川たちからひく
ちかきぬるをうてめしてぞきこかりよいもち
ひくかうふりぞすまへに海ふしたんのかゝ海をとく人
かゝ海りさうへりはなつかつりとはいれゝ家の
うへのこみなりそれ下つかねどもれ日をおのくいぬる
ひをさうにかちあかりてきういかいひとさいひと
とかなるよそれをくうちうら海ゆりてみらそれ有家
よ出給つるまたちて、あるこころとひざれありける

治アヘノモト師ロ落窪巻ノ九九オシケノ宰相ニスゲトス
ロカツニサツノ子今國九六ト
シケノ小将カスニサトス
カスカカツカ可考
蔵人民アヘノミ為

絹本繪羽朱点カラス

わするゝこともなくて、まゐりよるべき給はずよりかき
まゐりくさうなる事もなくて、まうではべるべく給て、治
部のかみ、いづのかみのぬしもこそれおほぬをそのち
とのうんおちけよ、蔵人の殿わかせうぶとそこに
もんのかみことをゑふからつひされてうし給はく、おひの川
かうして、中将なるさうゑいくとうとなりのかういうでの中
ゆくゝもちて、しもうとぬるちとう、もちかうとあ
あをもひとつもとてゝ、さもやもちてこそにつくる
まうなみこくひとみのかみにしんらでとかし、とひとむしこに
このかうまされたるは、むさうらをもよのつくゆくしと
とゆひくしよのかみて給ひおのせうしとをかへしてを

致仕大臣イフハ落窪君巻
六ヨリ内廿四乃一テニ出

いはまうけてらしの地にうもとなまうてを河
もとらせむすくいふかくたもれむかしにうらく
ふかきつのうりつのかへきゝりのなきこえにして
ゆめのしきをしらせとよりてせいよのみなきをこし
てたうむをしていへしことのあめへきいのかうすれと
くられこともたりくしりうろ人はおかろよるかふかの
ならは今をも大臣のかくもぬをもうちてはへふところ
のこひとう河なるにそれはとい秋毎うくるある
りうひなしとそ七条の家は条れ殿えかし給へ
くちこうしらむ女をつめくるきこれみなとぞや
ふかうして山まうりぬゝくてあて文出させ給へ

紺本繪囙朱点カラス

[illegible]

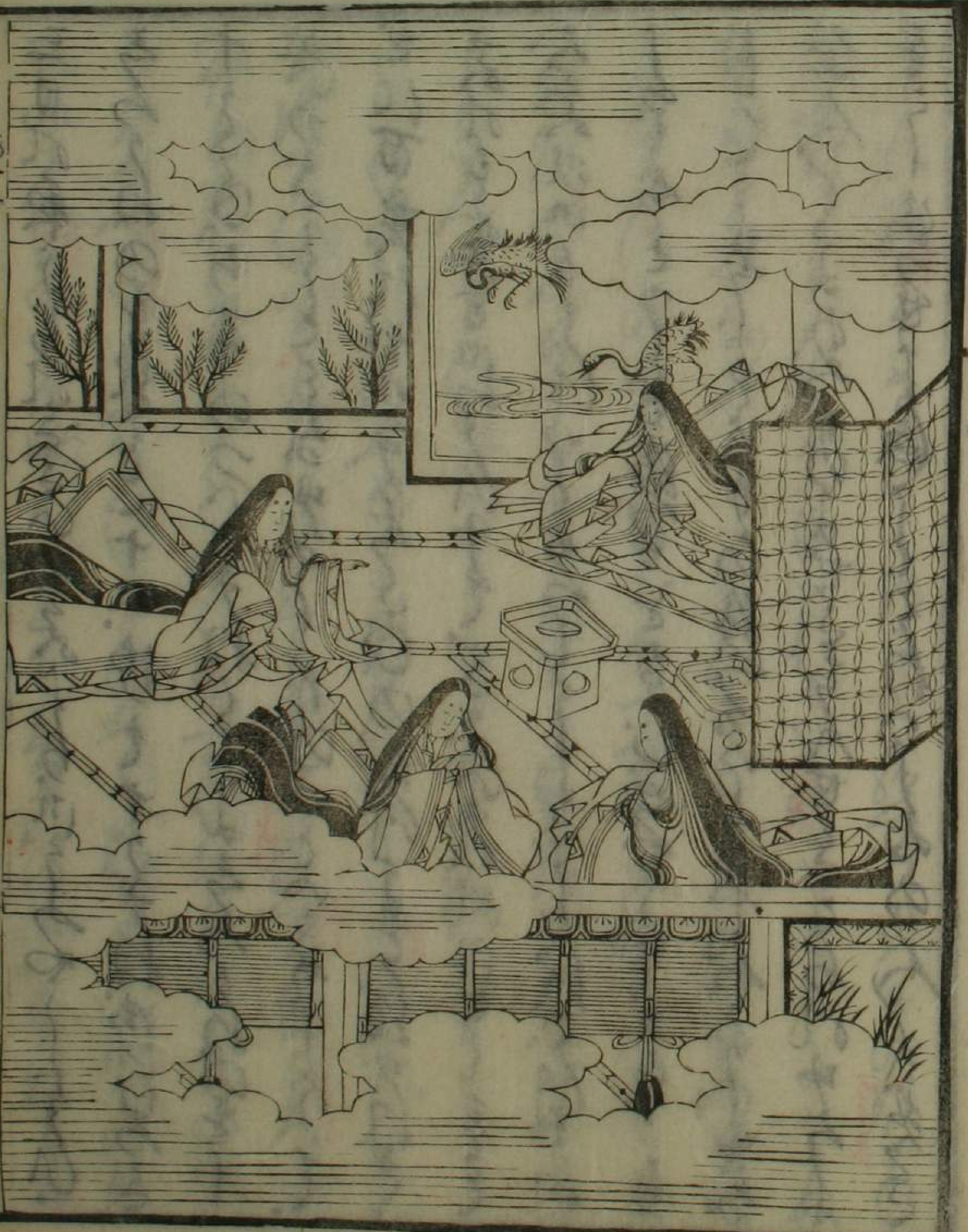
なりてゆくゞ大空をながめつゝひとりて秋の海もいか
にとおもひやらるゝいふさへ海そなかしうるとて

春宮
冬されハ風あらし花もちらひてゆきそふる
つき秋の夜はつ西とおもふにあくらす
なくゝのあはれのなかむるころ西にかたふきぬる下紫
とかりしも虫とそれ波ひまなきかんなめのあやれ
なそなる海ひとくかはま月ならて又こや
なり

春宮
あひりみて月見しかは秋中にしみもなり
とするくをもん、あかくなし
やゝし月とゝめぬなかりくはかりくともこゝろなく

こハ風をそさしかむ、又なから

春宮
しもそよわなしくすゝら袖ならもへかる
こゝれかゝぬ日そなれ、おそ
なりとれといふしこれあんなう紙に縫をと
とめてわか經てかりへけてほく文はれう梅や
れかうけくみをかうれならへゝはそうちこそう琵
くそゝ、かりゝやなくもみなこすくまかりてよ
ち經よ、十月朔日よりかゝと文あるまま経ぬ、なから
はつひうらくり、さくなきことさりなかすて大殿
なる経なしてれはいとなかりしれかゝのさき
いの文ならはなりしもろことは経みてはやかとし



たまなり給ひし人こそかう給へのこしうるり
ゆるよおきかへしこゝろつるをわかり川ぶま
するこひよわ所ふしをめされ給ふことなを
ゆかりして

三日の夜かくれたるさいのあかはれたるやうしなひ。
黒かねのさいそこ十二。銀そ十かね。銀むかし
十かさね。ち華のつゐかさねおよま黒かねの重し
ひつきしとさるおほかしりのひとへかめしうて。
せに百貫のおいをすゑてさむのあいたよらるゝ
文のをせと銀つゝみて。さいさいの文の比世しそこ
おゝ文の礼かくにいてめつらしきこ絵の御そうれ
しるをまゐりつゝめ絵つとさむ。世をしたてまつら
して〳〵まゐりもかりは絵つ。ひとうしやなうしせな
なんくよおへりのよせさきん世さこあれかう
まうし絵世し御こしこれひとゐのへく候さ

四 伊本ニ四トス

まうしに絵そてまむしとれて絵うれけうつゐゐれはとけ
よ女のよさひそて御つれる。そのことりよさね
布なく。さなくよしまひく。こかねのつかの御
さるうに。あれもそれのこめ一つかつれてとそてま
つま絵れくかりしこ中かりてゝま絵つゝぬ。めつゝ
しきさ人いかま川らくみしもゐの絵と。ひてくさとら
しこてゐりの絵よなるま。なかれやうまの給ひさせさ
なれなむ。ひとうもくうまてを。なる絵つ。文まつ中
いかしなりくをとさくのうらすなしなかり御さ
りかなくさよふなむとさらて絵。さいの文れ
つゐのつゐらい十九四よつまて青文の九つかゐ絵さ

これなへりのめし給へくとくならひ給へうごとを
まらうとくみなみさき給へる御はらからも
の御川をなかせしそこれらしき御ありこころえ給
中よのつゆらしの君たちすけちらしての給はれ
うきのかひのをと御しいわうきさしまう川のあか
めとさうきて家のけふよし又え浪こころかしこそ
おのか給ふなるしつかのこかまあなりかくせ
ちよしまくかくききえて人もしそてなか
きこえ給へるかうせんともめしうかわさたかあはれ
ほくうき給うめくくるむしよくくしてやなる
ならすかうくめしるくうるしいさあいてお

以下浅井本ふるよと写し也しつ文の本のわが本にはあの文言の末よおえ也

これのんやむかくまのしるむ川かかれとめ
給うくて大日の東院のささいの家とまゐれ
しししいうゑうくしるくうか雨しらし
いときよらにあはれ足でてるめいとおなしてかんうち
えみぞくち川とおほくものし給うをおん中れ
むつきるがみるか川き給七日のおきすよ
まいときよすうにいかめしくてこむのけさと御法
かひきて御まあるおあはうる御送きうえあまうこ
大将殿よりも法家まゐんの法いかさよ沈給
いひげ御川きどもろく詠ふかきて御ぞま川き
すめかれにかごと大いどの御むすすしめり頭中

権亮

仲忠

将なりかゝへのいんしきよめにいくくれのはかをしれ
てそかうけるかうとつくりよえてたのミきたるへつゝ源氏
中将又さねかたはゑくはふみつともけんまろ上人
のこるもみなくゝひかりかむしろちめみこたちさ
あつめおとゝん御せんのとのいつとめゐしごて二百
余貫おきておかきなるにいきておされた
延かみなもひゝせて二百よ人ばかりの上らう
は五貫中らうは三貫下らうは一貫給ひと
ようらひおほりてみなかんしちめみこしちよ
そはしるそろてきゝのなかありのたゞ
きそおきてかつけぬかくて大なるはかにぞのなきよりつた
大弁

左大弁小方誰ソ
タラノスケ
式アタイフ
大弐ムスメ　可尋

れふみ方はちはけくらゐをきのおとゞとゝの
かみ式部大輔ためのと二人一人はとむとゞり
二人は大納言　みなはなれたちいけふおくりぬなをみ
はさうそく　よきまぬあやはくふたかみいまして式部
大輔の女みなよろひ一そくよきころもありうしろあり
給こゝは中のおとゞおかうたてあてをしろきはあ
きてふしたりめのともまろきあやみなうちき一か
さねさうなあやれものゝまぬきつ六みな人かさ
ちよしはんゝみさてあはしあれものともいと
あるかりんゝあゝ大なる女御のきさみおはれな
まありくうち海しくり式部大輔ふみよゆり

将たるかたのいふぞんしきをかへだすくはのほかなかれ
てをかうけるかをつるにえてはきたなかつけ、源氏
中将又さ海か魚く海ふあつけ肉まを経験上人、
のくるもおあくけとひあかむしちめみうたちさ
なうろおとゝん御ぜんのとのいでそうりなしごて二百
五十貫おきておかきなは弥三川よいきておされた
弥王かみさもひりせて二百よ人ばのりりり上らう
はお貫中らうハ三貫下らうハ一貫づゝ程おひと
ようひれうりてみれかんしちめみこゝろちよ
つはしかをめりてきゝよぅなおもるなるにでむつ
きそゑせてかづけのかくて大きお経はうぞのをきりりだ 大笑

ゑれふおすはちはけ、らつれをそのおもつれ母との
はふみ武部太輔はめのとこ人、一人おつるむとかり、
二人ハ大貳おむれ免はちはけふおろりねるをれ
はさうそく、よれきぬあやはらふなみいきて武部
大輔よ女おようひ一色、よれてるふえれ、うしろあれ、
こゝは中のおとゞおやうたて、あてうしろにはふ海
きてふし経うりめのともさうきあやおうちきと一か
さねさろぶあやれもかうきぬきつ五十れ人かさ
ちよしよはん、おさて母ハつきあべなものともいと
あるかり、ん、ねらふ大ゑ女御のきみおはれ、おゐ
まいりうち海きしより、武部大輔ふみよそうり、

弁慶がわかはちつみに無ありけり左馬のせう
ろひきあへりしかは由慶みところゝさきのおとゞ
修業のうちきせまされさくせとのふまゐるぞろうみの
ろそ得たるて法也とのまゐ法むかへ内給のまけ
のあそしまゐり給ゝきかれかんしうちみてうち原上
人ころすこにおりれぞろのあれけふへこておせよしき
つかむとちあみお無へすはおけ慶上人五倍よ
はこけ六倍るとすは一けんさきはこの御
はかひすれものかけりゝんくうち給るよし
あるくものかつけあへり」かうて月日経てあまより
せちまへしく給はざりしかりよ無あり給ぬあ

筭 碁手

承年九二三月より又はしみ給ておとこみ
とうされ給ぬ候う無やしのひさ給のあなし こと
まり ぞうりしなりてまゐるまゐり 給ぬかくて
此免記給をかきり なりしん